

自発反射については、各症例その経過は多様であるが、いずれも正常な範囲にある。

慣れについては、実験群で20回かかる症例が1例あったが、全体として両群に著しい差異はみられていない。

各刺激語群の反射量では、両群ともA語群が他の語群にくらべて1%の水準で差がみられている。B語群では、統制群がC語群と、実験群がD語群とそれぞれ1%の水準で差がみられている。また、潜時については、統制群でA、B語群がC語群と5%水準でしか差がみられていないが、実験群ではA語群がC、D語群と1%の水準で差がみられる。

本研究では、内省について詳しく検討していないが、全体として、言語報告の結果とGCRの結果とは、かならずしも一致しないことが多くみられる。

22、国立療養所西多賀病院に入院の進行性 筋萎縮症児（者）の親子関係に関する研究 I

国立療養所西多賀病院

星 八重子 昆 貢 子
後 藤 親 彦 浅 倉 次 男

〔はじめに〕

現在当院に入院中のDMP児（者）と親に対して若干の考察を行なったので報告する。親子の断絶が社会的に問題にされてから久しいが、当院においても療育上の問題の中で親子関係が掲げられる。そこでDMP児（者）と親達とのお互いの意識、例えば親に対する要求、子に対する期待等がこの疾患の場合どのように反映しているのか、それぞれの立場に対して観察を行なった。

〔経 過〕

乳離れも完全でないまま長期療養を余儀なくされている患児（者）達にとって、年間数回の外泊、月何度かの面会で、親に対してどのような態度をとったら良いのか戸惑いを覚えているようである。自由にならない体を持つ自分達を両親は如何に思っているのか、また親の方でも家族と共に生活させてやれない事での葛藤や負い目を感じているようである。

ある日面会に来院してみると、寡黙になっている子ども、親より職員に目を向けてしまう子、この心理を親達はどの様に受けとめれば良いのかと悩む姿を見ることができる。

事例Ⅰ 患児A（14才）

母親は何も話してくれないと子に不満を持つ。父親は本児の好きな将棋の相手をと勧めるが無関心・外泊時も本児と祖母の二人の生活が殆んどで帰より病院の方が楽しいとの本児の感想。親への遠慮がみられ、職員に甘え要求を出してきたり、親との接触より明るくふるまう。

事例Ⅱ 患児B（15才）

親との接触を持ちたがらない様な発言をする子に対して親は言われるままに行動をとる。実際には本児の意に反した発言であり、親が主体的に接触を持ってくれる事を期待している。

DMP児（者）と親に対してのアンケートは必要としながら検討の段階で終始してしまった。しかし上記のような事例を観察してみるとやはり今後アンケート等を利用し、データとして残すべきであると考えている。

アンケート作成を検討した結果、子の幼年期、少年期、成年期と親は子に対してどのような感性期待、理解、要求等を持っているのか、また子どもに対しても同種類の質疑を投げかけてみたいと考えた。

【考 察】

今回この様な案を打ち出すのみで終わってしまったが、まず感ずる事は、子どもの個々の行動についてその都度断片的な知識を得る事だけでなしに、日常の中で共に悩み、共に苦しむといった様な日常子どもと生の人間的なふれあいを深めてこそ子どもが見えてくる。その中でお互いがそれぞれについて理解を深め結びつきも深まっていくであろう。

しかし、患児（者）と親については日常の中で喜怒哀楽を共にすることが殆んどまれであり、お互いがそれぞれ悩み、心を痛めている状態である。

今後このDMP児（者）と親との問題を明確にする為に各方向から観察を深め、アンケートをはじめとする資料収集を行ない、患児（者）と親の望ましいあり方を見い出していくとともに、職員としてのアプローチの仕方をも考えていきたい。

13、P・M・D児の社会性

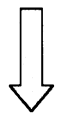
— 絵画欲求不満テストを実施して —

国療 再春荘

末 竹 寛 子

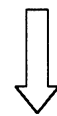
【目 的】

私達は、日常生活の中で、様々な欲求不満場面に遭遇する。その欲求不満場面における反応は



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



〔はじめに〕

現在当院に入院中の DMP 児(者)と親に対して若干の考察を行なったので報告する。親子の断絶が社会的に問題にされてから久しいが、当院においても療育上の問題の中で親子関係が掲げられる。そこで DMP 児(者)と親達とのお互いの意識、例えば親に対する要求、子に対する期待等がこの疾患の場合どのように反映しているのか、それぞれの立場に対して観察を行なった。